

# 歴史を語る建物たち

第5回

今日、20世紀型の開発優先社会は終息を迎え、文化、景観、観光などの側面から歴史的建造物が見直されるようになってきた。平成8年の登録有形文化財制度の発足などは、その象徴である。しかし、一方で、文化財指定を受けていないがその価値は十分にある古い建物が、道路の拡幅などで無造作に壊されていく現状もある。本シリーズでは、文化財指定を受けた有名建造物から、街中にひっそりとたたずむ建物まで幅広くスポットを当て、それらの歴史的経緯やエピソードなどを紹介する。

## 日輪舎（金山町）



今回とりあげる建物は、ちょっと変わった形をしている。円形に近い平面形と、円錐形のトンガリ屋根。長年の風雪にさらされ味の出た下見板張りの外壁。山形県最上郡金山町有屋のカムロファーム倶楽部にあるこの建物は、「日輪舎」とよばれている。

平成14年に初めて金山町を訪れた筆者がこの建物の存在を知ったのは偶然であった。そのときの、「なぜ、これがここに？」という驚きは今でも忘れられない。

### 茨城県内原訓練所の「日輪兵舎」

というのも、この独特の形をした建物は（分献上ではあるが）見覚えがあったからである。戦時中、満州（現在の中国東北部）に数え年16～19歳の青少年を移民として送り出す、満蒙開拓青少年義勇軍という制度があった。その訓練所が昭和13年に茨城県の内原（現在は水戸市内）の広大な土地に満蒙開拓青少年義勇軍訓練所（以下、「内原訓練所」ないし「内原」と略す。初代所長・加藤完治）として設立され、そこには「日輪兵舎」の名で知られる宿泊・研修用の建物が350棟近く

建ち並んでいた（写真1）。それとほぼ同形の、その名も「日輪舎」なる建物が、なぜ山形県の金山の山中にあるのか？カムロファーム倶楽部の管理者の岸治さんに聞くと、他に飽海郡遊佐町にも同様のものがあるという。筆者の「内原以外にもあった日輪兵舎」探しの旅はこのとき始まった。

### 全国にあった？「日輪兵舎」

そもそも「日輪兵舎」とは、内原訓練所内の建物の固有な名称で、古賀弘人という建築家が設計した。それが戦時中、各地に広がったらしい。しかし、具体的にどこにどれくらい建てられたのかはわからない。そこで、そうした建物の存在を、当時の雑誌、新聞、地方



写真1 茨城県内原訓練所の日輪兵舎。  
『拓け満蒙』第2巻4号（昭和13年）表紙より。

自治体史などから「発掘」する作業を行った。山形県外にもおよんだ調査の結果、その数は予想以上のものとなり、これまでに戦時中に全国で少なくとも40カ所程あったことがわかった。各地での呼称も「日輪兵舎」「日輪舎」「日の丸兵舎」などさまざまだが、内原の日輪兵舎をモデルとしていたことはあきらかである。なぜ全国各地にそのような建物が建てられたのか。

日輪兵舎の「日輪」とは太陽の意であるが、それは単に平面形が円に近いからというだけでなく、当時の天皇崇拜の象徴でもあった。国策としての満州移民キャンペーンの拡大につれ、内原のシンボルとしての日輪兵舎はその独特な形態とともに全国に知られるようになり、各地の学校、地元の教育会、移民関係団体、民間財団等の所有する修練農場等に、相次いでそれを模した建物が、建設されたのである。

## 山形県の「日輪兵舎」

山形県には、少なくとも4カ所にこの形態の建物があつた。しかも2カ所は現存し、そのうちの1カ所がこの金山の「日輪舎」である。この数は都府県別にみても多いほうで、しかも2棟現存するのは現在筆者が把握している限りでは山形県だけである。「本家」の内原でさえ、現在は復元されたものしかないのである。山形県は、長野県に次ぐ満州移民送出県であり、前述の加藤完治、鶴岡市出身の石原莞爾ら山形県とゆかりのあつた満州移民唱導者の影響力もあつて、当時は満州移民の先進県とよばれていた。山形県に日輪兵舎がいくつも建つたのも、そうした経緯と無関係ではないであろう。

ちなみに、県内の金山町以外の日輪兵舎は、南村山郡教育会の経営・日本国民高等学校の運営による柏倉門伝村（現・山形市）の白鷹道場（昭和13年開設）、山居倉庫を運営した（財）北斗会による旧蕨岡村（現・遊佐町）の鳥海農民道場（昭和16年開設）、石原莞爾の教えを受けた個人が開設し、戦後石原も来住した飽海郡高瀬村（現・遊佐町）の西山農場（昭和18年開設、建物現存）にあつた。



写真2 菅原善松さん。  
金山の「日輪舎」の前で。



写真3 戦前の白鷹道場（旧柏倉門伝村）の日輪兵舎。  
菅原善松さんは前列左から5人目。  
『思い出の写真でつづる「創立八十周年記念誌」上山  
農業高等学校写真集』平成4年より。

## 日本一の「日輪兵舎」を造ろう

金山町の「日輪舎」は、昭和18年に満州に向かう青年に農業訓練を施すために、東北有数の大規模山林地主が運営する（財）岸農産育成会が開設した神室修練農場の教室兼寄宿舎として建てられた。2階建てで中央の土間の周りを板敷きのスペース2層が取り囲んでいたという構造は、内原のものとは共通する。しかし、内原の平均的な日輪兵舎より軒高が高く、径も大きく、堂々とした印象を受ける。それもそのはずで、金山町の「日輪舎」は、オリジナルの内原のものよりさらに上を目指していたというのである。開設時に農場主任として勤務した菅原善松さん（金山町在住、写真2）によると、当時「日本一の日輪兵舎を造ろう」との意気込みで建設されたという。大規模山林地主の農場ならではというべきか。

菅原さんは、実はその前に、山形県で最初に日輪兵舎が建てられた左記の白鷹道場にも、山形県立上山国民高等学校の教員として勤務し、南村山郡等の多くの学校から実習に来る児童・生徒を指導していた（写真3）。山形県内の2カ所の日輪兵舎にかかわった方なのである。日輪兵舎が円形のプランを持つ利点について、菅原さんは「教師が中央に立って、まわりながら話をすれば、どの生徒とも同じ距離から話しかけることができる」と語る。

## 戦後の金山の「日輪舎」

戦後の神室農場では、葉たばこの栽培などが行われ、戦地から復員して農場に復職した菅原さんも、それに長年携わつた。頑丈に造られた「日輪舎」はそのまま作業小屋として用いられ、中では葉たばこをつるして乾燥させたりしていた。

平成10年に、神室農場はカムロファーム倶楽部として生まれ変わり、自然と触れ合うためのレクリエーション施設となった。「日輪舎」は現在、イベント会場や体験農業の場として用いられている。傷んだ部分の修復もなされ、「将来的には登録有形文化財への登録を目指したい」とカムロファーム倶楽部代表者の岸薫さんは語る。

日輪兵舎は、戦時中の特殊な建築として、戦後の建築史上ほとんど顧みられず、内原以外にも多く存在したことも忘れ去られていた。しかし金山の「日輪舎」は、ひっそりと長い時を刻み続け、今また新たな役割を得て活かされている。このことは多くの人に驚きをもって受け止められるであろう。現在とは異なる価値観の中から生まれた異形の建物は、今なお不思議な存在感を放ち続けている。

（東北公益文科大学 准教授・松山 薫）

東洋大学大学院総合文化研究科博士課程修了。博士（学術）。専門は人文地理学。